



インタビューした少数民族の方とクラスメイトと(一番左が筆者)

## 勉強するなら現地の大学で

〈大学間協定留学(交換型)〉  
 フィリピン大学ディリマン校  
 明治大学国際日本学部国際日本学科  
 藤本 侑佳

### 1. 東南アジア実習から協定留学へ

春に参加した、日本 ASEAN 相互理解プログラム「東南アジア実習」では、タイのバイリンガルスクールで英語教師のアシスタントとして1ヶ月間研修を行いました。半年後の今は、フィリピン大学ディリマン校へ留学し、地域開発学の基礎を学んでいます。授業では主に貧困・開発とは何か、貧困から脱却するための地域参画型開発ノウハウを学んでいます。授業のない週末には、いわゆるスラム街と呼ばれる地域の子も達を対象にチューターのボランティアをしています。タイでは幼稚園生が、フィリピンでは小中学生が対象なので年齢に違いはあるものの、現在のボランティアではタイでの研修の経験が大変生きています。やり方の工夫一つで、子ども達が興味を示してくれるかどうかが変わるので、レクリエーションを準備する時はタイでの経験を思い出して趣向を凝らしています。

### 2. 東南アジアでの生活

東南アジア留学が、欧米留学と大きく異なる点は生活面にあると思います。カルチャーショックと捉えるかどうかは個人差がありますが、私の場合、日常生活の小さな出来事に深く考えさせられることが非常に多いです。電車の窓からは、高層ビルが立ち並ぶエリアとそのすぐ近くにスラム街が広がっている様子を見ることが出来ます。フィリピン国民の経済格差を視覚的に初めて捉えた衝撃と、その際の何とも表現し難い複雑な気持ちを忘れる

ことはできません。そして、この国では iPhone を持てることは普通ではありません。服装や所持品が人々の経済状況を顕著に表すとはどういう意味なのか、フィリピンに来て心底実感しました。キャンパス内でさえ、ストリートチルドレンを見ない日はありません。屋台で食事をしている際は、他のお客さんが食事を終えて席を立つと、ストリートチルドレンが走ってきてテーブル



留学先のキャンパスの様子

に残された残飯を食べ始める光景を目にします。ショッキングですが、これがフィリピンの日常です。何度目にしても慣れない日常が東南アジアにはあります。「しつこく物乞いをする子ども達にどう接するべきなのか。ただ無視するのか、小銭を手渡すのか、飴玉をあげるのか…」これは、私が東南アジア3カ国を知って以来、日常的に考えるようになった事柄の一つです。

また東南アジアへの留学では、日本が過去にアジア諸国を植民地支配した歴史と必ず向き合わなければなりません。フィリピン大学には、同じアジア圏(インドネシアや韓国)からの留学生が多く、彼らやフィリピン人全員が日本に対して肯定的な意見を持っている訳ではありません。幸い、理解ある友人達に恵まれ、私が日本人だからといってそれだけで否定的な態度を取る人には出会っていません。しかし植民地支配された歴史は、決して過去のものではなく、現在も彼らの国々に社会的・経済的・文化的影響を与えていることを、授業中や友人との些細な会話から気づかされます。この歴史を日本人としてどう解釈しているのか、はっきりとした個人的な意見を真剣に考える機会をもらいました。

### 3. 将来のこと、留学のこと

東南アジアを選ぶ理由は、将来もこの地域に関わっていきたくて考えているためです。正直なところ、ここでの経験をどう将来に繋ぐことができるのか具体的な道は定まっていません。しかし、貧困格差への疑問を解消できないと思ったとき、留学するなら現地の大学以外選択肢はないと信じてフィリピン留学を決意しました。現状をこの眼で見て、同じ分野に問題意識を持つクラスメイトと意見交換し問題と向き合うためにこの国へ来たことは、将来を具体的に考える上で最善の選択だったと思っています。しかし、だからといって将来もこの国で仕事を見つけたい気持ちに直接繋がるわけではありませんし、むしろ、フィリピンの低開発や貧困問題を勉強すればするほど、日本が抱える貧困問題に視点を向けることが多々あります。それらの問題は隠されているだけであって、確実に日本にも同じように助けを必要としている人がいることに気づかされます。



街の果物市場

フィリピンの現状を授業やボランティアを通じて学びながら、将来自分に出来るアクションを模索中です。たとえ微力であったとしても、過酷な環境下で生きる子ども達が安全な場所で生活を送れるようにアプローチしたいという想いが現在東南アジアへこだわり、将来も関わっていきたくて考える理由です。

また近年の東南アジアの著しい経済成長は、日本企業から大きな注目を集めていることも事実です。特にフィリピンは、街を歩いていて子どもや赤ん坊の多さに驚くほどに国の平均年齢の若さを実感します。将来働く上で、労働人口が増加しているこの地域との関わりは、より一層根強くなるのではないかと考えています。そのため、東南アジアに関する知識や経験は必ず将来に生きてくると個人的に思っています。

留学のメリットは、自分に少し負荷をかけることでより充実した日常を送れることだと考えています。留学中に直面する壁は、決して言語だけではありません。一年中高温な気候に順応すること、新しい土地で一から人間関係を構築することは想像以上に労力が必要でした。でも苦勞が多いからこそ、周りの人に助けられる機会が多く、日々感謝の気持ちを持って生活を送ることができています。授業内容を100%理解することはまだ難しく、授業後に教授のところへ個別の補講に毎週通っていますし、大学の授業とは別に現地語のタガログ語習得にも注力しています。本当に興味のある分野だからこそ、授業後に「今日も楽しかった」と感じることができ、この環境に感謝しています。

良い意味でフィリピンに慣れたくありません。慣れは日々の感動や疑問を忘れさせてしまうので、今後の留學生活においても小さな出来事に感動し、問題意識を持ち、吸収していきたいと思っています。

---

**MEIJI UNIVERSITY**

\*協定留學等、明治大学の留學制度について詳しくは[こちら](#)をクリック